

〈論文〉

ゲーテの『イタリア紀行』¹

加藤 芳子

(1) 序

イタリア文化の影響を受けた芸術家は、イギリス人だけにはとどまらない。しかしその中でも英文学が、とりわけ重要な位置を占めていることは確かである。²拙著『英文学とイタリア——ペトラルカの伝統』(近代文芸社, 1998年)に於て、筆者は特にイギリスのルネッサンスの時代にスポット・ライトをあてた。通史的な総論は、その第1・2章にまとめておいたが、今度は、その他の時代のイギリス及び他の国々はどうなのであろうかという問題が更に出てくる。³

そこで本論では、18-19世紀ドイツ古典主義時代のゲーテの紀行文を調べて、彼がイタリアをどう捕えていたかを明らかにしてみようと思う。

(2) ゲーテの『イタリア紀行』

ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ Johann Wolfgang von Goethe (1749-1832) は、ドイツのフランクフルト・アム・マインに生れるが、父親がその書齋にイタリアのヴェネツィアのゴンドラの模型を飾っていて、幼い頃から遠いイタリアの文化に淡い憧れを抱きながら育った。

1775年カール・アウグスト・ワイマール大公に招かれ、当地の宰相となる。ワイマールでの激務と詩作活動の停迷と苦悩、そしてシャーロット・フォン・シュタイン夫人との恋の苦しみから逃れようと、イタリア旅行(逃避行)を思い立つと、1786年9月3日、カールスバートで駅馬車に乗り、突如としてイタリアに向けて出発する。

古代ギリシア・ローマの文化は、イタリア・ルネッサンスに復興され、以後ドイツでは、いわゆる「疾風怒濤」Strum und Drungの時代を迎えていたが、ゲーテのこのイタリア時代による成長の結果、秩序と調和を重視する古典主義 Classicism が確立されることにな

る。

アルプスの山々を越えてイタリアに抜けたゲーテは、1786年9月3日から88年4月23日までの間、主にローマやナポリ、シチーリアなどに滞在し、ギリシア・ローマの古典時代の遺跡を見学しては、遺物、骨董品、絵画、彫刻など、あらゆる物を購入したり、それらをデッサンしたりしていく。そのあたりの事情は後に、『イタリア紀行』*Italienische Reise*として、1816年から翌17年にかけて出版されていくことになるが、ゲーテがまずイタリア関係のもので出版しているのは、『トルクアート・タッソー』*Torquato Tasso* (1789年)という、イタリアの詩人の一生を描いた戯曲であり、次は、『ファウスト』*Faust* (1790, 1808, 1832年)である。悪魔メフィストフェレスに魂を売るファウスト博士の物語は、イギリス・ロマン派詩人ジョージ・ゴードン・バイロン卿 Lord Byron, George Gordon の『マンフレッド』*Manfred* (1817年)や、後のウォルター・ペイター Walter Pater 作の長編小説『享楽主義者マリウス』*Marius the Epicurean* (1885年)にまで影響を与えていく。

ゲーテは作家なのであるから、その紀行文『イタリア紀行』の中には、古代ローマやイタリアの文学にかなりの言及があるに違いない、と思ってこの本を読み進むと、大変な期待はずれとなってしまう。イタリアに滞在していた時に、青年ゲーテが一番興味を持っていたことは、少なくともこの国の文学というものではなかったようである。彼は、書物を通して知っていたイタリアという国をその眼で見て、感じ、研究し、記録にとどめ、吸収しようとしていたのである。見るもの全て、感動なのであった。そして、その奥にある本当の目的は、彼自ら述べている次の言葉によって知ることができる。

9月17日、ヴェロナにて。

……自分がこの不思議な旅をするのは、自分自身を欺くためではなく、種々の対象に触れて本然の自己を悟り知らんがためである。⁴

(上巻, 65頁)

17 September

My purpose in making this wonderful journey is not to delude myself but to discover myself in the objects I see.⁵

(57頁)

つまり、ゲーテにとってのイタリア旅行は、「自己発見のための旅」なのであって、いわゆる「古典の研究」というものは、ここから派生したものの1つにすぎなかった。ゲーテ

は、わずか数年間で精力的にイタリアを観察し批評していく。その対象はイタリアの人々、建物、地質、植物、政治、宗教——実際、彼はかのリンネの『植物学綱要』や、プリニウスの『博物誌』などの書物を持ってきていた——しかし文学の話は、余り出て来ないのである。

その典型的な例は、北イタリアのヴェローナの町に関する部分である。ヴェローナと言えば、シェイクスピアの悲劇『ロミオとジェリエット』(1597年)の舞台となった町である。誰しも、ゲーテは、シェイクスピアのこの名作にゆかりの場所をあちこち訪ねて、何かこの名作についてコメントを述べるはずだと期待するだろうが、全く期待はずれなことこの部分には、シェイクスピアの「シ」の字も出てこないのである。ヴェローナでゲーテが真先に訪れたのは、何と円形劇場の建物であった。彼は一体本当に作家なのであろうか、彼はひょっとして、この町がこの劇の舞台であることすら、当時はまだ知らなかったのではないだろうか——筆者は、ふとそう思ってしまった。この町について評している第3章で、ゲーテが述べているのは、ヴェローナの町の人々の様子とか、イタリアという国の国民性などにすぎないのである。しかもその書き方は、およそイタリアに対して好意的なものとは言いがたいもので、支配している国の上流階級の者の立場から、支配されている国の貧しさや文化の低さを見下しているものであって、古代ローマの文化に憧憬と敬意を抱いてゲーテの丁度100年後に訪れたイギリスの作家ジョージ・ロバート・ギッシングの視点とは、根本的に異なったものとなっている。

広場は市の日にはいっぱいの人出だった。見透しがつかぬくらいの野菜と果物、堪能するほどの大^{にんにく}蒜と玉^{たまねぎ}葱。そのうえ一日じゅうわめいたり、ふざけたり、歌ったり、さらにまたたえまなく、殴り合ったり、掴み合ったり、^{とき}鬨の声を上げたり、笑ったりする。温和な気候、安価な食物が、彼らの生活を安易にするのである。誰だろうと、いやしくも出られるものは、みな戸外に出ている。

やがて夜になると、いよいよ放歌高唱が本式に始まる。マールボロの小唄は町の辻々にきこえ、それからシンバルにバイオリン。口笛であらゆる鳥声の真似をする。怪しげな物の音が到るところに耳朶を打つ。温和な風土はこういう生活の余裕感を貧者にも賦与しているのである。それに民衆の屑のような人々の生活も、まったく捨てたものではないように見える。

私たちが甚だ異様に感ずるほど家屋が不潔で、あまり居心地がよくないのも、そうした所に起因している。つまり彼らはいつも外出をしており、持前の無頓着さから何もかまわないのである。民衆にとっては何でもよく、何でも文句はないのだ。中流人

士もその日暮しをしている有様である。貴顕富豪はその邸宅にひきこもっているが、その邸宅にしても同様、北欧ほどのいい住み心地ではない。種々の会合は公会堂などで催される。がその前庭から柱廊にいたるまで汚物塵芥でたまったものではないが、こうするのをしごく当り前とっている。

(上巻, 71-72 頁)

On market days the squares are piled high with garlic and onions and every sort of vegetable and fruit. The people shout, throw things, scuffle, laugh and sing all day long. The mild climate and cheap food make life easy for them. At night the singing and the music get even louder. The ballad of Marlborough* can be heard in every street, and here and there a dulcimer or a violin as well. They whistle and imitate all kinds of birdcalls; one hears the most peculiar sounds. In the exuberance of their life this shadow of a nation still seems worthy of respect.

The squalor and lack of comfort in their houses, which shock us so much, spring from the same source; they are always out of doors and too carefree to think about anything. The lower classes take everything as it comes, even the middle classes live in a happy-go-lucky fashion, and the rich and the nobility shut themselves up in their houses, which are by no means as comfortable as a house in the north. They entertain company in public buildings. The porticos and courtyards are filthy with ordure and this is taken completely for granted.

(60-62 頁)

つまり、当時のゲーテにとって、イタリア人というものは、金持ちであろうと貧乏人であろうと、不潔で、騒々しく、けんか好きで乱暴な点は特にかわりなく、何事にも無頓着でいられるのは、その温和な気候のせいなのだろう、といった具合で、無秩序と混沌、混乱の典型であるかの如くうつつっていると見えよう。

当時のゲーテは、この『イタリア紀行』を読む限り、作家というよりはむしろ自然科学者のような面が強く見うけられる。しかも彼は、フォルクマンの『イタリア案内』(1770-71年)を頼りに、これを確認するために旅をしている観すらある。以下の一節は、まるで、科学者の自然観察を思わせる好例であろう。

さらに私の注目を引いたのは、山の高さが植物に及ぼす影響という点であった。私は高山において、必ずしも新しい種類の植物を発見したというに止らず、普通の植物

でもその成長のしかたが異なっているのである。低地においては枝や茎が肥大していて、芽と芽の間が近より、葉も広いのであるが、山地に登ると枝と茎は細くなり、芽と芽の間が離れ、すなわち節と節との間隔がひろくなって、葉は槍の形にとがってくる。私はこの現象を柳や竜胆において認めたのであるが、これは別に種類が違うのではないと確信する。ワルヒエンゼーの畔でも、私は低地にあるものよりも細長い灯心草を発見した。

これまで私が横断してきた石灰アルプスは、灰白色を呈し、美しい異様な不規則な形状を有している。もっとも岩は鉱層や地層に分たれているけれども。しかしながら層が弓形を成す部分もあり、一般に岩がそれぞれ異なる風化作用をうけているので、岩壁や山嶺が珍妙な形状を呈している。こうした山の状態は、ブレンナー峠のよほど上まで続いている。しかし上部の湖水附近にゆくと、また具合が変わってくる。多量の石英を織りこんだ暗緑色および暗灰色の雲母片岩に、白色で緻密な石灰岩がよりかかっていたが、それは裂目のところで微光を放ち、無数の^{かげき}鱗隙を有しながらも、大塊をなして露出していた。その上の方にもやはり雲母片岩があったが、この方は前のよりも脆弱^{ぜいじゃく}なように見えた。さらに登ってゆくと一種特別の片麻岩が現われたが、これはむしろエルボーゲン地方などに見るごとく、片麻岩に附属してできる一種の花崗岩である。この山の小舎と相對して上の方に見えるのは雲母片岩である。山から落ちる水流の運んでくるのは、ただこの雲母片岩と灰色の石灰岩だけである。

どうもこの附近に、すべてこれらの岩の親元たるべき花崗岩の根幹が存在するに違いない。地図で見ると、ここいらは四方の低地への分水嶺にあたる、真の大ブレンナー峠の側にあたっている。

(上巻, 33-34 頁)

My attention was drawn to the obvious influence of high altitude. I not only saw new plants but also familiar ones with a different kind of growth. In the low-lying regions, branches and stems were strong and fleshy and leaves broad, but up here in the mountains, branches and stems became more delicate, buds were spaced at wider intervals and the leaves were lanceolate in shape. I observed this in a willow and in a gentian, which convinced me that it was not a question of different species. Near the Walchensee, the rushes I saw were also taller and thinner than those of the plain.

The limestone Alps through which I have been travelling so far have a grey colour and beautiful irregular shapes, even though the rock is divided into level

strata and ridges. But since bent strata also occur and the rock does not weather equally everywhere, the cliffs and peaks assume bizarre shapes. This formation continues up the Brenner to a considerable altitude. In the neighbourhood of the Upper Lake, I came across a modification of it. Against a dark-green and dark-grey mica schist, strongly veined with quartz, there leaned a white solid limestone which towered glimmering above its screes, a huge, deeply fissured mass. Further up, I found mica schist again, though it seemed of a softer texture than that lower down. Higher still, appeared a special type of gneiss or, rather, a kind of granite approximating to gneiss, such as one finds in the district of Elbogen. Up here, opposite the Inn, the cliff is mica schist. The streams which flow from these mountains deposit nothing except this rock and grey limestone.

The granite massif upon which all this leans cannot be far away. My map shows that we are on the slope of the Great Brenner proper where all the streams of the surrounding region have their sources.

(33頁)

この傾向は、ゲーテがシチーリアを訪れた時でも、変わることはなかった。以下は、パレルムモ近くのオレトー河の谿谷での小石の蒐集に言及した部分である。

河水の^か涸れている諸所の浅瀬で、私が小石をさがしていろいろな種類を採取して行くのが、この男にはさらに不思議に思われたらしい。溪流の中に押し出されている石を調べると、こういう山岳地方の概念は一ばん早く得られるということ、また岩石の破片を調べて、あの地球古代の永遠なる古典の高所に関する概念を得るのが、この場合の問題であるということを彼に理解させるのは、先ほどと同様不可能な仕事であった。

この河での私の蒐集はそうとう豊富で、ほとんど四十ばかりも集めたが、もちろん分類してみるとそんなにたくさんあるわけではない。その多くは碧玉とか角石とか、或はまた粘板岩ともいわれている種類の岩石であった。私はこれらの岩石を或は完全な層をなして、或は不整形の層の中に、また時としては菱形をなしているのを見つけたが、色彩はさまざまである。そのほかに古い石灰岩の変形もあったし、角礫岩も相当にあった。この角礫岩の結合の材料は石灰だったが、結合されている方の石は碧玉や石灰岩であった。その中には貝殻石灰の層もあった。……

パレルモの地方の平原、町の外にあるアイ・コリ地方、及びバガリアの一部は、地盤が貝殻石灰であって、町はその上に建っているのです、この辺には大きな石坑がある。モンテ・ペレグリノの近くの或る場所では、石坑が五十フィート以上の深さを有する。地層の下の方は色が白く、その層の中にはたくさんの珊瑚や介殻^{かいかく}や、特に大きな帆立貝の化石がある。層の上の方は赤い粘土が混っていて、貝殻は稀に^{かた}あったり、全然なかったりする。ずっと上の方は赤い粘土であるが、その層は硬くはない。

(中巻, 75-76 頁)

He must have thought me still more of an eccentric when he saw me searching for pebbles in the shoals which the river had left high and dry, especially when I pocketed several specimens. Again, I could not explain to him that the quickest way to get an idea of any mountainous region is to examine the types of rock fragments washed down by its streams, or that there was any point in studying rubble to get the idea of these eternal classical heights of the prehistoric earth.

My haul from the river turned out to be a rich one. I collected nearly forty specimens, though I must admit they could possibly all be classified under a few rubrics. The majority are probably some kind of jasper or chert or schist. Some were round and smooth, some shapeless rubble, some rhomboid in form and of many colours. There was no lack, either, of pebbles of shell-limestone.

Shell-limestone underlies the plain on which Palermo stands, the region outside the city, called Ai Colli, and part of the Bagheria. The city has been built of it, hence the large quarries in the neighbourhood. Near Monte Pellegrino there is one quarry more than fifty feet deep. The lower strata are whiter than the upper and contain many fossil corals and shellfish, scallop shells in particular. The uppermost stratum is mixed with red clay and contains few fossils, if any. Above this there is only a very thin layer of red clay.

(230 頁)

ゲーテは、ボルシュ伯の『シチリア及びマルタに関する 1777 年の通信』(1782 年)を読んで、シチリアの鉱物の研究をし、予備知識を得てから、実際に磨石工を訪れて、彼らが言う「固い石と柔かい石」、つまり大理石と瑪瑙^{めのう}の見本を眺めてきえているのである。これらの石は、教会や祭壇を飾る重要な材料であった。

イタリア人の国民性に対するゲーテの評は、どちらかと言えば辛口であり、ゲルマン民

族の目から見て、明らかにラテン民族を見下している面がある。しかも以下の引用の最後の部分には、ローマ・カソリック教徒に対する、プロテスタントとしての批判も加味されている。

この国の人民については、彼らが宗教や芸術の華美と尊厳との下にありながら、なおさながら洞窟や森林に住んでいるのと何ら異なるところのない自然人であるという以外、他の言葉を知らない。すべての外国人の眼につくもの、今日もまた全市の噂に上っている——もっとも噂に上るだけなのだが——ものはよく起る殺人事件である。われわれのこの区でも、この三週間に、四人もの人が殺された。今日も今日とて、シュウェンディマンという優れた芸術家がウィンケルマンと全く同じように襲われた。スイス人の彼は、ヘトリンガーの最後の弟子で、記念牌彫刻師なのである。彼と格闘した殺害者は、彼に二十カ所もの突き傷を負わせ、番兵がやってくると、自殺してしまった。しかし、自殺はこの土地では珍しいことで、人を殺しても寺院に身を寄せれば、それで済むのである。

(上巻 191-192 頁)

All I can say about the Italians is this: they are children of Nature, who, for all the pomp and circumstance of their religion and art, are not a whit different from what they would be if they were still living in forests and caves. What strikes any foreigner are the murders which happen almost every day. In our quarter alone there have been four in the last three weeks. Today again the whole city is talking of one, but it only *talks*. An honest artist called Schwendimann, a Swiss medallist and the last pupil of Hedlinger, was assaulted exactly like Winckelmann. His assailant, with whom he had got into a scuffle, stabbed him twenty times, and when the guards arrived, the villain stabbed himself. This is not the fashion here. Usually, the murderer takes sanctuary in a church, and that is the end of that.

(145 頁)

まるでイタリアは、殺人犯にとっては楽園、無法地帯であると言わんばかりである。

上記の前半に於てゲーテは、イタリア人が単なる野蛮人にすぎず、殺人事件は日常茶飯事であると述べているのである。古代ローマ帝国の人々は、ゲルマン民族を野蛮人としてきめつけていたのに反して、ゲーテの時代には、事態が完全に逆転しているのである。ゲーテの意識の中には、この国がかつては栄光に包まれた国であり、ゲルマン民族が征服し略

奪した結果このように荒廃し遅れた国になってしまったのだということは、全く欠落しているのである。

ゲーテは、一方では、当時のイタリア人を侮蔑していながらも、他方では、古代ローマの偉大さに歓喜しているらしきところもあるが、それでも彼は、形而下的なものにとらわれているだけであって、結局のところ彼の最大の関心事は、このイタリア旅行の意義と自分との関係なのである。

精神は有能という刻印を押されて、無味乾燥ならざる厳肅さと、喜びに満ちた落ち着きとを獲得する。少なくとも私は、今この地においてほどこの世の事物を正当に評価したことがなかったような気がする。私は生涯に残るべきこの幸福なる影響を喜んでいる。

では成り行くがままに、身を興奮にゆだねよう。順序はおのずからつくであろう。私はここへきて、自己流の享樂に耽ろうというのではない。四十歳にならぬうちに、偉大なものを研究し、修得して、自己を成熟させたいと思っているのだ。

(上巻, 181 頁)

His soul receives the seal of a soundness, a seriousness without pedantry, and a joyous composure. At least, I can say that I have never been so sensitive to the things of this world as I am here. The blessed consequences will, I believe, affect my whole future life.

So let me seize things one by one as they come; they will sort themselves out later. I am not here simply to have a good time, but to devote myself to the noble objects about me, to educate myself before I reach forty.

(137 頁)

ゲーテにとって、自らを発見する旅は又、時には、自らの孤独を発見する旅でもあった。パドヴァの市庁の応接間の丸天井を見て、丸天井という空間が、「一種の仕切られた無限であって、人間にとっては星空よりも親近の感じがする」、星空は、「われわれをばわれわれ自身から奪い去るが」、丸天井は、「きわめてやんわりとわれわれ自身の中へおし戻してくれる」のに感銘を受けた後、更に、聖ジュスティナ寺院の丸天井の雄大素朴な造りに圧倒されて、ふと自分が孤独であることをひしひしと感じている。

今夕私はその一隅に坐って沈思黙考した。私はその時わが身の天涯孤独なるを感じた。

現に自分のことを考えていてくれる人でも、誰一人として、自分がここにしようなどとは気づかないだろうと思ったからである。

(上巻, 88 頁)

Tonight I sat there meditating in a corner. I felt very alone, since no one in the world, even had he thought of me at that moment, would have looked for me in such a place.

(73 頁)

孤独感と不安にも負けずに修業を続ける中で、「海と結婚した女王ヴェネチア」で、ゲーテは、父親がくれた幼い頃の玩具、ゴンドラの模型を思い出し、ブチントロなる「豪華撓走船」を見て、ヴェネツィアの誇り高い国民性を知る。同日ゲーテは、海軍工廠を訪れ、船の樅材が細工される過程を見学するが、この一節には、科学者としてのゲーテと芸術家としてのゲーテとの接点がかいま見える。

人間が結局材料として用いかつ利用するところの自然界の事物に関して、私が苦心の結果獲得した知識が、芸術家や職人の仕事を理解する上に、どれだけ役立ってくれたかは到底言いつくせることではない。山岳やそこに産する鉱物に関する知識も、芸術の方面で私に裨益するところまた大なるものがある。

(上巻, 109 頁)

I cannot repeat often enough much my hard-won knowledge of those natural things, which man takes as his raw material and transforms to suit his needs, helps me to get a clearer idea of the craftsman's technique. Just as my knowledge of mountains and the minerals extracted from them is of great advantage to me in my study of architecture.

(87 頁)

ゲーテは結局、友人ティッシュバイン、クニープ、アンゲーリカ夫人と暮らしたイタリアでの生活に終止符を打ち、蒐集した芸術品等を祖国に送り、自らも帰国する。『若きウェルテルの悩み』を出版した青年ゲーテは、イタリアでの修業を糧にして、ドイツ古典主義を代表する文豪へと成長していくのである。

註

- 1 この論文は、日本英文学会北海道支部主催第 39 回英米文学講座（於 北海道大学文学部）に於ける講演、「イタリアに魅せられた作家達」の一部に加筆修正を施したものである。
- 2 イギリスに関しては、拙著『英文学とイタリア——ペトラルカの伝統』（近代文芸社、1998 年）の第 1,2 章に総論としてまとめている。
- 3 19 世紀英国の小説家としては、ギッシングを論じた拙論「ギッシングの『南イタリア周遊記』」、『札幌大学総合論叢』、第 7 号、113-123 頁を参照。
- 4 ゲーテ著、相良守峯訳『イタリア紀行』（岩波文庫、1997 年）3 巻。以下、邦訳はすべてこれによる。
- 5 J.W. von Goethe: *Italian Journey* (1786-1788), translated by W.H. Auden and Elizabeth Mayer (Penguin Books, 1962). 以下、英訳はすべてこれによる。